

続 同志社ワンダーランドを楽しもう

百合野 正博	同志社大学学生支援センター所長 同志社大学商学部教授
講師紹介【ゆりの・まさひろ】	〔研究テーマ〕 説明責任を負っている集団の提供する情報の検証の重要性について

大学はワンダーランド

ただ今ご紹介にあずかりました百合野です。今日のテーマは去年と同じテーマ「同志社ワンダーランドを楽しもう」です。テーマをいろいろ考えたのですが、題名は一緒でも中身を変えればいかなということ、同じテーマで違った話をしようと思います。

スピリット・ウィークでお話しなさるのは新島研究の専門家ばかりですが、私はそうではありません。単なるサポーターといいますが、今、鈴木先生からご紹介いただきましたように、「同志社大好き人間、新島襄大好き人間」です。去年も持ってまいりましたが、今日私のコレクションを見ていただきながら、話をしようかなと思っております。

私は同志社関係のものを何でも集めています。これは『同志社大学設立の旨意』の現物です。入学式で抜粋が朗読されるものの現物といいますが、郵便で地方の篤志家に寄付を募った時に同封されたものです。封筒はこれです。社史資料室（現社史資料センター）で調べていただきましたが、残念ながら新島先生の直筆ではありませんでした。でも、新島先生の判子がついてあるのでいいかなと思って、コレクションにしています。

一番最近のコレクションはこのカップです。私はこうして携帯電話にも新島先生をくっつけて、夏場だとこのように見えるようにしているのですが、これと同じデザインですね。商学部の新入生歓迎会の記念品です。新島先生がラグビーをしています。中に“Go, go, go in Peace. Be Strong.”という、一回目の卒業式で新島先生が言われた言葉が入っています。皆さんも何かこういうものがあったら、コレクションに加えますので、こんなしょうもないものと思わずに一度持ってきてください。コレクターというものは貪欲なもので、何でもいただきます。

さて、「同志社ワンダーランドを楽しもう」というこのテーマ自体は、ある予備校が大学フェアで使っていたキャッチフレーズです。「大学はワンダーランドです。受験生の皆さん、そのワンダーランドを楽しみましょう」というわけです。私も大学はワンダーランドだと思っていますし、とくに同志社には一三〇年の歴史、素晴らしい建学の理念、そしてそれを実行に移した新島襄という校祖がおられますので、他のどの大学にも負けないワンダーランドだろうと思っています、このテーマを今年も選びました。

今日は、新入生はいますか。ああ、一人いる。ちょうどよかった。では君を中心にしゃべります。よく聞いてくださいね。ワンダーランドを十分に楽しまいと、今のちょっと流行の言葉ですが「もったいない、もったいない」ということを、話したいと思います。

同志社の七不思議

楽しむと言いますと、面白いものを連想しがちです。たとえば、僕らも同志社に入った時にすぐ聞いたものですが、同志社には七不思議があります。七不思議、ご存知ですか。サツと七つ言えますか。今日はちょっとコピーしてきました。一つ目は「今も同志社に異変があるごとに鳴り響く彰栄の鐘」。今出川キャンパスにある中学校の建物、彰栄館の鐘。しょっちゅう鳴っているように思うんですね。二番目が「女子寮の夜のピアノの音」。シヨパンのセレナーデ。女子寮ってどこにあったのですね。三つ目が「深夜の若王子」。若王子というのは新島先生のお墓のあるところ。その山道で、「新島先生の棺を担いだ学生の掛け声がこだまする」というもので、ちょっと気持ち悪いですね。でも、今日だったら桜もまだ哲学の道に咲いていると思うので、ぜひ行ってらっしゃい。哲学の道の一番南端のところに若王子神社という神社があって、その横に登り道があります。一本道ですからすぐ分かります。四番目が「神学館前の古井戸で夜毎釣瓶の空回りの音」。神学館というのは、今のクラーク館です。すぐ横に茶室がありますから、その関係で井戸が掘ってあるのかもかもしれませんね。

それから五番目は、割合有名なもので「何度置き換えても大宰府とエルサレムの方を向く石の牛」。これも現物がありますから探してみてください。六つ目は「神学館の塔から月を眺めよう」と階段を登ると、ステップが無限に続く」。今言いましたクラーク館ですね。現在改修中にして、完全に覆われていて見えません。工事現場を見せていただいたおり、実はこの階段を上がって行ったのです。普段は上がれないのですが上がりました。「ああ、これがこの七不思議の階段やな」というふうに思いましたが、昼間でしたからステップは無限に続きませんでした。七番目は、「またしても夜中に北寮の扉を開く、亡くなった勉強家の亡霊」。ちょっと学校の怪談みたいな感じですが、この七つだそう。でもこういう話言ってみれば即物的な話で、もう少し大学の中身からいろんなワンダーランド的なものを探したいなと思います。

『同志社大学設立の旨意』を読む

去年、私がここで話しました時の肩書は学生部長でした。その前は入試センター所長というのをやっていた、入試が無事に終わって、学生部長に就任したのですが、学生部長としての最初の仕事は入学式で『同志社大学設立の旨意』の抜粋を朗読することでした。

今年も朗読したのですが、去年と今年で違うところが一カ所あったのです。気が付きましたか？と言っても誰も知らないでしょうね。実は、新島先生が、「遂に元治元年六月十四日の夜、竊かに国禁を犯し、米商船に搭し、水夫となりて労役に服する凡そ一年間、ようやく米商船に搭し、達したる」というところがあるんですが、この水夫（すいふ）という言葉について、二代前の学生部長（石川健次郎商学部教授）が、「新島先生の当時、水夫（すいふ）という言葉はなかったはずや。あれは水夫（かこ）と読むのが正しいはず」と言っていて、私も気になっていました。ただ去年は水夫（すいふ）と書いてあるのを水夫（かこ）と読む勇気がなく、水夫（すいふ）と読みました。でも、今年もまた練習していて、そのところを、「水夫（かこ）となりて」といくと、トントントンといくんですね。水夫（すいふ）となりて、ではなく、水夫（かこ）となりて、の方が感じがよい。それで複数の先生にお伺いしたら、「水夫（すいふ）と書いてあるけれど、この時代は、水夫（かこ）と読んだはず。水夫（かこ）という言葉が普通の言葉」というふうにおっしゃいましたので、そう読みました。どこからもクレームがきませんでしたのでそのようにフリガナをうっておこうと思います。

伊藤彌彦先生からもアドバイスをいただきました。「元治元年六月十四日の夜（よる）じゃなくって夜（よ）で止めたらどうか」。確かに声に出して読んでみるとその方がいいですね。ですから来年読む方には、「遂に元治元年六月十四日の夜（よ）、竊かに国禁を犯し、米商船に搭し、水夫（かこ）となりて労役に服する凡そ一年間、…」こういう形で読む方がいいのではないですかとお伝えしようと思っています。ま、要するに、私は仕事を楽しんでいるというか、やはり皆さんに新島襄のこと、同志社のことに関心を持っていただけたらなというふう強く思っているんですね。

ですから今回も、自分の学生時代を振り返って、「同志社をこんなに好きになったのは、その広い意味で自由主義、国際主義、キリスト教主義という三本柱を肌で感じたからだ」というお話をしようと思っています。ただ今年ちょっとヤバイのは、聞いてくださっている中に、一人同じ時代を過ごした人がいることです。先ほどそこで見つけたのですけれど、僕が四年生の時に一年生だった会計研の後輩でして、今はスペイン語の先生をここでしているのですが、家内の同級生です。彼女が覚えていのかどうか分かりませんが、その時代のことを知っている人が一人いるということです。

昔の学生の活発な動き

今日の私の肩書は学生支援センター所長です。去年は学生部長でしたからポストが変わったのかということ、そうじゃないのです。同じポストの名称が変わりました。今日のお話の中心の一つは、学生支援センターは「昔の学生はいろいろと活発に動いた、それをもう一度取り戻すための一つの助けになるような仕事をしています」というものです。実は私が学生時代に学生部というところに行ったことがあるかということ、全くありません。私の父は公務員でしたから奨学金をもらうこともなかったし、会計研の活動をしていましたが、学術団や学友会のところには行ったものの、それを飛び越えて学生部には行っていません。学生部に行っていたのは学友会の活動家、それに付随していた人たちだったのではないかなと思います。

私は一九六九年に同志社大学商学部に入りました。四月の入学式は無事ちゃんとおったのですが、入ってすぐにパレードストライキというのがありました。パレードストライキというのは今では想像もつかないと思いますが、要するにあの正門のところにこういう動く机や椅子を、パーツと積み上げて、そしてくっつけて、赤旗を何本も立てて、赤や黒のヘルメットをかぶってタオルで覆面をした人が上において、拡声器で演説をするという状況ですね。ですから学生は、まず短期間のパレードストライキならキャンパスに入れませんが、学校までやってきて「ああ、休講か」と半分嬉しそうな顔をしながら帰って行くというのが当時のパレード封鎖の様子です。

そして、六月から無期限のパレードストライキに入りました。無期限と言いながら十二月に機動隊が入って解除されましたが、要するに半年間、同志社大学では授業がなかったのです。同志社EVEもなかったし、自治会選挙もありませんでした。

私のワンダーランド時代の生活

その間何をしていたかと言いますと、バリケードはあったのですが、実は、小門（小さい門）が開いていましたので、そこから出入りができ、中でいくつかの授業が、単位は出ないけれども行われていました。先生がちゃんと来て、授業がありました。同志社自由大学と呼んでいました。あとは学会館（今の寒梅館）とその別館のボックスに集まって会計研の例会をしていました。

また、今出川のキャンパスの西門の真向かいにあるニュー北京の二階でも例会をしていました。懐かしいので、今でもしょっちゅうニュー北京でご飯を食べます。学長も、副学長も、国際センター所長も来るのですよ。やっぱり懐かしいのでしょう。同じ世代ですから。

会計研の例会をしているところに機動隊が入ってきて、いきなり壁に並ばされて、写真を撮られて、という経験も持っています。「簿記の勉強しているんです、簿記ですよ」と言っても「分からん、同志社のやつはみんな過激派や」とか言われて並ばされて。うちの家内も、友達と東京へ遊びに行ったら、職務質問を受けたそうです。「東京の学生ではありませんか」「学生証を見せて」「同志社の学生です」と言ったら、「同志社が一番危ないや」と東京でも言われたそうです。赤軍派がいたり、まあ本当に関西では拠点だったのですね。

会計研の例会が終わるとマージャンをしたりお酒を飲んだりしました。珉珉という餃子屋がありますが、学館で勉強した後は歩いて出町の珉珉まで行って、ちょっと腹ごしらえをした後、四条河原町まで行って、「静」とか安い一杯飲み屋で議論して帰るといこういうパターンでした。

いかにそういうパターンの生活を繰り返していたかを物語る不思議な経験があります。山科駅前の珉珉のおばあさんが、二年ほど前ですが、ジンギスカンを食べている僕のところに寄ってきて、「お客さん、出町の珉珉でご飯食べたことない？」と尋ねてきました。「あるけど」と言うと「見覚えがある」と言うのです。そのおばあさんに僕は見覚えがないけれど今、逆算すると三十代のおばあさんやったのかな。僕はその当時ひげはないし、でも彼女は僕を見覚えているのです。三十年前の話ですよ。「出町柳の珉珉でも見たよ」とか言われて、「えっ」とかいう感じだったのですが、かなりひんぱんに珉珉で食べていたということですね。

学生運動というのは、本当に今の平和なキャンパスから想像もできないですが、事あるごとに、とにかく集会はあるは、がなりたてるは、あるいは大衆団交というのがありまして、今でも心に残っている大衆団交があります。その当時の秦孝次郎という理事長は学生のほうから言うと、頑固爺さんで、本人が団交に出てくるけれど、頑として「ハイ」と言わない。周りから学生が何を言おうと堂々と構えて、答えるのですよ。その秦理事長は、一九七二年十一月二十五日に亡くなられたという記録があり、その前に辞世の歌「赤ハルの学生 おのがコート脱ぎ 吾に着せたり 激論の中」というのが残っているのです。私は長い間この歌を読まれた現場に居合わせたと感じていました。寒くて、雪が降って…。ところが一九七二年十一月二十五日と言いますと、私は十二指腸潰瘍で入院していたのです。その何週間か前に阪急電車で倒れ、死線をさまよっていたのです。実は、四年間の間のいつかに秦さんの団交を見ていて、それが本を読んで、秦理事長がそういう歌を残して、数日後に亡くなったというのを知り、そう思い込んだのだらうけど、そうじゃなかった。日常的に学生は学校に対していろんなことを要求していたんですね。

学校には騒然たる雰囲気がありました。他方、喫茶店で話をしたり、御所で弁当を食べたり、あるいは鴨川に出て、去年は六月の奨励でしゃべりましたが、ゼミの時間に先生とビールを飲んでゼミをしたり、相国寺の中を歩けば何人かがギターを弾いたり、それなりに楽しんでいるというのも一方でありました。

映画もよく見ました。『通販生活』という通信販売のカatalog+アルファの雑誌に昔の京一会館という京都の北東にあった映画館の支配人の話が出てきます。懐かしくて読んでみると、「岩倉に同志社の大成寮という汚い汚い学生寮があって、そこの学生とか来て、京大の熊野寮という、これまた汚い汚い寮の学生も寄って来て、どんな映画が見たいという話を喧々譁々やる」。まさにそのなです。僕も授業が終わった後、オールナイトの映画を見に行って、その頃はやくざ映画ですから、だんだん自分が高倉健のような気持ちになってきて、朝になって出てくる時は皆こうやって肩張って歩き、横にいる女は藤純子やという感じの雰囲気の生活をしていました。

自分でワンダーランドを見つけよう

ですから、そういうキャンパスの中、あるいは同志社の近辺、あるいは京都の学生街というものを全部を楽しんでいたのではないのでしょうか。学長もよく言われますが、「京都、同志社、新島襄」という、このトントントンと調子のいい「京都を、同志社を、新島襄を」本当に楽しんでいたのではないのでしょうか。去年の最後は、「しかしワンダーランドかどうかを見極めるのは皆さんですよ」ということで終わりました。「ここにいい空間があるのだから、そこがワンダーランドだということを見つけるのは一人ひとりですよ」と。これは実は、学生部長になりたての四月七日のことでした。私の経験をお話したのですが、そのあと学生部長としての仕事が始まりました。五月には学生部を組織変更して学生支援センターになりました。そのプロセスで私は非常に大きなことに気がつきました。

学生支援センターは、昔の僕らが知っている学生部ではないということに気がついたのです。あるいは今言いましたように学生さんにワンダーランドを自分で見つけて楽しんでくださいと言ったけれど、実は今の学生さんは、自分でワンダーランドを見つけることにあんまり関心を持っていない人が多い。たとえば、さっきキリスト教文化センターの職員の方が大変苦労されていましたが、授業に出る学生がワーツと通っているのにここに入ってくる人は非常に少ないですね。まあ、四人、よく来てくれました。いつも来ていただいている方は来てくださるのですが、なかなか学生さんが入ってくれない。つまり「ここで何をやっているのかな、この話を聞いたら何か自分にとって新しい話があるのかな」ということをあまり気にしない。とにかく授業に出て、授業が終わったら帰るのです。

私は今それが一番気になって、今年のモットーは、同志社を「通う大学から、暮らす大学」に変えたい。つまり「いっぺん学校に来たら、暗くなるまで帰らない」場所にした。今年はその思っています。ザーツと通学してきて用がなくなったらザーツと帰って行く学生に「いやいや、そんなんしとったら、ワンダーランドは結局四年間で見つかりませんよ」というふうに言いたいです。

学生支援センターがそのためのいろんな工夫をしているんだということを去年いろいろと仕事をして知ったのです。仕事を始める前の四月七日に「見つけるのはあなたですよ」とちょっと突き放したのですが、その後、実は学生支援センターはそのためにいろんな試みをしていることを知り、今日はその試みに気付いてくれれば、ワンダーランドを見つける上で役立つんじゃないかなというお話をしようと思います。

学生支援センターの試み

ここ二、三年よく使われる言葉に、二一世紀COEというのがあります。Center Of Excellenceつまり最先端の研究をしているかどうかを審査して、これに対して、最先端の研究をしている大学には予算を出すというものです。初年度、同志社は一件も採択されませんでした。ライバル校が採択されたものだから、袋叩きにあいまして、特に先輩連中から「何してるんや、同志社は」と言われました。二年目は二件通りましたのでホッと安心しました。今度は特色ある大学教育をしているところに補助金を出しましょうというのが始まったのです。GP (Good Practice)と呼ばれています。これに学生支援センターの試みを応募しました。

その頃は学生支援センターと学生部と並列で両方ありました。その元々あった学生支援センターの試みを応募したのです。応募した後に組織替えがあって、学生支援センターの基本的な姿勢を学生部全体で共有しようじゃないかということで名前も変えました。ですから今は全体が学生支援センターという名前になっていますが、私が引き継いだ頃はちょうどその過渡期でした。

それが見事に通りまして四年間で六千数百万円、学生支援センターに予算がおりたのです。ラウンジ棟や食堂にS-Cubeビジョンというのが入っているのに気が付きましたか。大きなプラズマテレビで学生支援センターのPRをしています。あの機材を一式買いました。あとは今年の目玉なのですが、新島先生の足跡をたどるツアー、ボストン、ラットランド、アーモストに行こうという企画を立てています。これは何かと言うと、新島先生が日本に帰る間際に、ラットランドのグレース教会でスピーチをされました。その時に聴衆の胸を打って五千ドルの寄付を集めたのです。聴衆の中の一人の老農夫が「これは帰りの汽車賃だけれども、自分にはこの二本の足がある。歩いて帰るから、これを君の大学のために使ってくれ」と、二ドルの寄付をしたのです。で、その老農夫はどこまで歩いて帰ったのか。何キロくらい歩いたのか。せいぜい二〇キロか三〇キロじゃないかというふうにして調べてみました。一四〇年前の二ドルの汽車賃です。新島先生がお父さんに手紙を書いて「アメリカには非常に便利な汽車というものがある、一里行くのに六セントの料金がかかる」、一里は四キロですから四キロ行くのに六セントかかるのです。二ドルですから一三三キロになります。なんぼなんでも一三三キロはないだろうと思って、商学部の鉄道専門の先生に聞いてみたら、その先生も直感的には二、三〇キロじゃないですかと言いつつ調べてくれました。すると当時、一マイル、二・四セント、これが新島先生の一里、六セントとピッタリ合うのです。それで一三三キロ、四捨五入して一三〇キロ。今年、同志社は創立一三〇周年じゃないですか。一三〇周年に一三〇キロを歩く。またラットランドを中心に円を描くとアーモストの上を通るのです。これは素晴らしい偶然じゃないですか、素晴らしいこじつけと言いますか。GP予算で行こうということで、今準備中です。

ただ単に「アーモストに行きませんか」だったら普通のツアーになってしまうけれども、「ラットランドの教会から、老農夫が寄付をした二ドルで汽車に乗れる距離を歩こうじゃないか。歩いて行ったらアーモストに着くんだ」というと、やはり目的意識もはっきりするし、「おおっ」という感じになりますよね。

私が新島襄に目覚めたというのは函館に行った時です。函館には、ここから新島先生が出て行ったという「新島襄海外渡航の地の碑」があるのですが、そこに立つと、今は前に埋め立てた島があるのでちょっと見にくいのですが、こんなところから上海に行ってアメリカ、ボストンへ行ったのか、と感動します。本当にそれだけで感動しますよ。一年間働きながらアメリカに行って、それから十年間アメリカで勉強して帰って来るのです。考えただけで気が遠くなります。それ以後は、すごい、これは並みの人間やない、と改めて実感したので。ですから、そういう体験をするというのは常に大きいのではないかなということ、実は学生支援センターは、もちろんそれだけではありませんが、そういう機会を提供しようという試みをいろいろしているのです。

コミュニケーション・デバドを埋める啓発支援

その基本になっている考え方は何かと言うと、コミュニケーション・デバイドの克服です。皆、自分の仲間内には友だちがいるはずですが、そこではコミュニケーションができて一旦そこから外れるとコミュニケーションが極端に下手になります。子どもたちも同じです。小学校のPTA会長をやっていた時ものすごく気になることがありました。僕は集団登校が嫌いで「自然発生的に誘って行ったらいいじゃないか」と言ったのですけれども、「それは危険だ」という意見が多く通らなかった。集団登校を見ていると、同じ町内でも、道のこちら側の班と向かい側の班が別だったら学校に行く時には一緒に行かないのです。班が異なれば、お互いしゃべらない、あいさつも交わさない、これが子どもの時から生まれているコミュニケーション・デバイドです。

コンパをしますね。もう大分前から気がついていることがあります。最近ちょっとましになったけれど、一時ひどかったのは大広間で焼き焼きを囲んで、こっこの鍋と隣の鍋との間にコミュニケーション・デバイスがあるのです。われわれの時にはあった、自分の鍋を離れて入り乱れて酒を注ぎ合い、あちこちでいろんな輪ができるという、これが自然発生的にできるのです。「さあ、そろそろ動きませんか」とか言ってやると「あっ、動いていいの？」って感じで動き始めます。この状態がうちの岩田課長の造語なのですが「コミュニケーション・デバイス」です。今のキャンパスには、まさにそういうデバイスがあって、これが実は学生諸君の日常的な生活に悪い影響を与えているのではないかと考えています。

それを克服するにはどうすればいいか。一つは啓発支援活動をしたらどうか。一人ひとりの思っていることがあるはずだから、それをちょっと引っ張り出してやったら動き始めるのではないかと。それから障がい学生支援活動。同志社大学には障がいを持った学生が多く入って来るようになりました。今、介助犬が二匹います。アトムとパツハですね。昨日、今出川の至誠館でパツハを見かけましたが、大きいですね。こんなに大きいかと思うようなブードルです。それから入学式や卒業式では必ず手話通訳がありますし、今、学生さんがボランティアで練習してくれているのは、CNNなどを見ていたらアナウンサーとかがしゃべったことがすぐに字幕で出るので、あれ。アルファベットは少ないから何とかなるのですが、日本語は漢字変換が必要なので大変難しいのです。それを二人か三人がセットになって、横に並んで講義を聞きながらキーボードを打っていき、そうするとほぼあれに近いものができるのです。ですから場合によってはオペラとか古典芸能とかでもやっていますが、舞台の下に字幕スーパーに文字を流していますね。あんな形で教室のスクリーンに先生の話す言葉が文字になって流れるようにすれば、耳の不自由な学生にとってはかなり改善されるんじゃないでしょうか。そういう障がい学生支援活動で同志社は全国的に注目されています。一般学生と障がいを持った学生と留学生の三つのデバイドを意識して、それを埋めていくことによって同志社大学は活性化されるだろうというのを、もう一つの柱にしているのです。

啓発支援活動の最大のものは、一つは何でも相談です。副業館の学生支援センターへ行ったらカウンターが低いですね。ラウンジもあって、そこに座ったらいつでもいろんな人と相談ができる。教職員だけでなく一般の学生さん、先輩がいてくれる。びあアドバイザーがいてくれる。同じところに国際センターとキャリアセンターのカウンターもあります。ですからここへ来れば学生さんの生活面に関連したいろんな相談ができ、手続きもできるということになっています。教務は同じ建物に別の窓口があって教務上のことはそこで扱っています。これは他の大学でやっていてもう、やっていません。たとえば、カウンターが高いところで話をすると、同志社はローカウンターでできるだけ座って話をしよう。チェアをいっぱい置いてあるという形にしてますが、全国で一番進んでいるのではないかなと思っています。

それに加えて潜在的な力を引き出すために、エンパワーメントプログラムとか、あるいはさっきも言いました、函館キャンブとか、あるいは今週末と来週末に行きますが新入生対象に、ファーストイヤーキャンブといったようなものを作って学生を刺激しています。GPのヒアリングのときに質問が出たらどうしようかなと思っていたら案の定出たのですが、「同志社の建学理念は、自治自立、独自一己、てき儼不羈じゃないですか。学生をそこまていねいに面倒をみなければいけないのですか」という質問ですね。私が答えたのは、「今の学生はそういうものを潜在的に持っているのになかなか出せていない。前に出たいけど躊躇している子の背中をポンと押してやったらトコトコ歩き始めるのと同じように、ちょっときっかけを作ってやれば、次はわれわれが常に手を差し伸べなくても、その学生さんが次の学生さんに影響を与えていって、それがこういう渦を作っていって、全体がそこに巻き込まれていくのですよ」と、パワーポイントの図を示しながら説明したのです。実際にそうなのです。

学生の自立心と学生支援

先ほどの障がい学生支援についても他の大学は、「それだけの事業をする予算がよくありますね」っておっしゃるのですが、われわれには潤沢な予算はないですよ。何をしているかと言うと、こういうことで手伝ってくれる学生さんにスキルを伝達し、そしてまたスキルを得た学生さんが次の学生さんと呼んで来てくれるという、最初の部分だけをやっているのです。そうすることによって、それほどたくさん予算を使わなくても、今の障がいのある学生さんに対してサポートが十分にできてくるという仕組みができあがっていて、これは狙い通りではないかなというふうに思います。

実は今年の入学式で大変うれしかったことがありました。去年入試センター所長をやっていた時に、重度の障がいを持った受験生がいました。電動車椅子は動かせるのですが、ほとんどしゃべれないし、字が書けない。社会福祉の先生に相談して、大学院生に来てもらい、机も新調し、いろいろ準備をした上で受験をしてもらいました。しかし残念ながら不合格でした。一年間忘れていたのですが、今年の入学式で彼が一目に気がつきました。式が終わって彼のところに行ったら、「三つ受かりました」と。授業を受けるのは大変だろうと思うのですが、今彼は学生支援センターにやってきていろいろな企画に加わってくれています。その彼を見ると、とても障がい学生には見えません。

留学中の経験です。ロンドンの街の中を、身体障がい者あるいは知恵遅れの子どもたちがたくさん歩いているのを見て、僕はですね、こんなにイギリスというのは身体障がい者が多いのか、あるいは知恵遅れの子が多いのかと最初びっくりしたのですが、実はそうじゃなかった。ロンドンにはそういう人たちが普通に歩ける環境があったのです。車椅子の邪魔になる自転車がない。美術館、博物館にそういうグループがいても、誰も嫌そうな顔はしない。知恵遅れの子どもたちに絵を説明する学芸員がちゃんとしている。それが日常なのです。そうすると、バスに乗る人の手助けを皆がする。車椅子で地下鉄に行っても全然問題がないという社会が出来上がるのです。このキャンパスにそういった障がい学生がいることによって、そのことが普通のことになる、その輪が広がっていく、というふうに期待しているわけです。

留学生も同じです。留学生の諸君についても、われわれが一から十まで手助けしていません。迎えに行くのもボランティア、宿舎の世話をするのもボランティア。となると、それなら学校がさぼっているのと違うか、職員が仕事をしないのと違うかと思われるかも知れませんが、刺激を与える仕事はしているのです。

ですから実は私は去年、ここで「どうぞワンダーランドを探しなさい」というふうに言ったんですが、大学が手助けをしている部分もあるのですよ。つまり、キャンパスをウロウロしたけれども分からない、という人はぜひ学生支援センターに来て、そして自分が思っていることをそこで出して欲しいなと思います。そうすればそれに対する答えが、多分その場で返ってくるはずなのです。そういう場所を同志社は用意しています。

同志社の建学の理念は、先ほども言いましたように三つの柱、入学式に聞くし、卒業式にも聞く、新島先生がこういう学生に育ててほしいと思ったのは、本当に一人立ちをして、責任をとって、自分で動いていって、他人が何と言おうと自分のその気持ちを通していくという強さを持った人たちだろうと思います。そういう人たちが二、三の英雄に代わって日本の社会を作っていくのだという強い気持ちで、イメージを作られた、そういった学生さんだろうと思います。しかし日本の社会自体の動きは、必ずしも新島先生が期待したようには動いて行かなくて、今、わずか三十数年前のそういう自立した人たちが多かったキャンパスとでも状況が随分違ってきている面があります。しかし同志社はその面を放置していないということです。そういう人たちに刺激を与えるのにはどうしたらいいのか、ということに常に考えています。

同志社は一三〇年経っていつも変わらない、伝統が長いだけの大学ではないのです。中身はいろいろと動いていて、学生諸君に刺激を与えようとしている。幸い同志社には絶対に入りたいという学生さんが多くて、併願校ではなくうちへ来てくれる率が非常に高いのです。そういう学生さんに、同志社が用意しているのは勉強だけじゃないよと強く言いたいです。新島襄や同志社についての本を読んだり、学生手帳に書いてあることを読んだりして、同志社の建学の理念を知り、あるいは同志社が勉強以外に用意しているものを知ってもらい、同志社での四年間、あるいはもっといてもいいんだけど、同志社での経験が社会に出てからの長い人生の糧になるような生活をここで送ってくれたらなと願っています。

学生支援センターというのは、はたから見ると学生と遊んでいるようにしか見えないうえですが、そうではなく、啓発支援をし、デバイドを埋めて、そして同志社らしい学生さんが育ってくれる場所、空間、刺激を提供する仕事をしているのだということを知っていただこうと思い、今日のお話をさせていただきました。

二〇〇五年四月十五日 同志社スピリット・ウィーク「講演」記録